

# 『安愚楽鍋』に見る待遇表現の要因

新 田 恭 子

## 一 課 題

待遇表現とは、話手が特定の対象について表現する場合に、それに関する諸種の要因を考慮して与えた待遇に応じて形の選択が行われた表現である。諸種の要因とは、水谷静夫教授の「行為としての待遇表現の仕組み」<sup>(註1)</sup>の第一階待遇から第三階待遇における社会的、心理的な上下尊卑の弁えである。これらの要因を弁えてから表現の形に至るまでの過程で競合すると思われる諸要因の關係について考察する。敬語体系が比較的安定していると思われる点と、登場人物・内容ともに多岐にわたり、写実的な会話文が得られる点とによって、資料としては『安愚楽鍋』<sup>(註2)</sup>をとりあげた。

『安愚楽鍋』の会話部分におけるプラス及びマイナスの待遇表現から帰納して、品格保持・知的優劣・精神的優劣・雰囲気の緊緩・身分上下・親疎・依頼行為が、待遇の要因として無視できない

いことがわかった。これらのうち品格保持・知的劣位・精神的劣位・雰囲気緊張・身分下位・疎遠・依頼行為が、単独でプラスの待遇表現となる。ここではプラス・マイナス相反する傾向にある待遇が競合した場合の優先順を明らかにすることを目的とする。なお待遇要因への命名は話手側を規準にし、例えば「知的優位」は表現対象や相手に対して話手が優位にあることを意味する。また考え方によっては、すべての待遇は精神的優劣に帰するが、ここの「精神的優位」は罵倒・叱責等、「精神的劣位」は賞賛・自慢(素材としての話手は話手より高い位置にあるとも解し得る。)等を指す。

註1 水谷静夫『国語および国語研究の代数学』(私家版、昭三六) 八三一—四〇ページ

註2 本文は『明治開化期文学集(一)』(明治文学全集1 筑摩書房 昭四一)及び『牛店 雑談 安愚楽鍋 用語索引』本文編(国立国語研究所資料集9 昭五〇)を使用。引用箇所所在は、後者所収

の国立国会図書館蔵本による。

## 二 データの分析

まず『安愚楽鍋』に見られる競合の例を示そう。

### ① 品格保持―精神的優位

○おころさん私をそんなはず葉だとおゝもひか (それしやあがり―茶店女 三下九オ6)

「見損ってはいけない」という玄人筋としての誇りに裏付けられた発言である。話手が精神的優位に立つ場合はプラスの待遇表現をしないが、ここではプラスになっていることから、品格保持は精神的優位に優先すると言える。

### ② 品格保持―身分上位

○牛皮のお菓子だらうじやアないか (歌妓―はこまはし 二下二ウ4)

○モシねへさん御酒となまをもつてお出 (茶店女―女中 三下十三オ3)

話手より身分の低い相手に対しても、女性としての品格を保持することを重視して、プラスの表現をしている。特に第二例において、「おさけ」ではなく「ごしゅ」と漢語を用いることで、女中に対して品格を示している。

### ③ 品格保持―雰囲気緩

○そんなにわるくおいゝでない (それしやあがり―茶店女 三下十二オ3)

○顔をあげてゐるとお尻を。をすやら (茶店女―それしやあがり 三下七ウ7)

### ④ 品格保持―親密

○一寸讀ンできかせやせう (新聞好―愚助 三下十八オ4)

○はいッてたべたのがお初會サ (それしやあがり―茶店女 三下三ウ4)

親しい間柄であっても品格保持のためのプラスの表現はなされる。

### ⑤ 品格保持―知的優位

○あれはネモシ斯いふ譯でござへス (西洋好―となりの客 初八オ1)

○僕などが淺智に分ることではないが(士―町人 二下二十ウ8)

話手としての士は素材としての士を卑下しており、話手の方が知的優位にあるが、第二階待遇表現において「僕」という語を用いて、素材としての士の品格を示している。

### ⑥ 知的劣位―雰囲気緩

○モシあなたはどいふ腕を出して婦人をおころしなざるの  
でげス (野幫間―若旦那 初二十オ4)

雰囲気はリラックスしていても、教えてもらうという知的劣位の要因によって、プラスの表現がされている。

⑦ 知的劣位―親密

○きれておくんなしといつてくれたのございますから (娼妓↓)

茶屋の女中 二上十一ウ6)

分別を弁えた忠告をした、親しい新造に対して、プラスの表現をしている。動詞「くれる」はゼロの待遇表現値であるが、右のような補助動詞「くれる」はそれが使用されない場合と比較して丁寧であり、従ってプラスの待遇表現値を持つと解せられる。

⑧ 精神的優位―雰囲気緊

○ひらけねへ奴等がわからねへ野暮をいふのは (西洋好

↓となりの客 初セオ8)

よそ人に対する会話の初期で雰囲気は緊張しているが、マイナスの表現がとられている。

⑨ 精神的優位―身分下位

○うごきやアがるεな (役者↓旦那 三上十六ウ1)

○たづねて来いといやアがつたくちをわすれやアがつてサ

(娼妓↓茶屋の女中 二上十三ウ2)

「ε」は時枝誠記博士の零記号を指すのに使った。

⑩ 精神的優位―依頼行為

○生肉もかはりだアはやくしろ (諸工人↓女中 初廿三ウ7)

⑪ 精神的優位―疎遠

○氣がきかねへ少女がきダ (落語家↓女中 三上廿二ウ7)

⑫ 雰囲気緊―親密

○おひくひらけてきやしたが (半可↓友先生 二上十四ウ5)

親しい間柄でプラスの表現をしているのは、会話の冒頭で雰囲気が硬いからである。

⑬ 雰囲気緊―知的優位

○平人の口へは這入やせんのサ (西洋好↓となりの客 初

セオ5)

○西洋にやアそんなことはごうせん (同 初セウ4)

自分の知識を披露し知的優位に立っているが、よそ人との会話の初期で雰囲気は硬くプラスの表現である。

⑭ 身分下位―雰囲気緩

○罪になりやすぜ (野幫間↓若旦那 初十六ウ4)

○花まちえたる今宵のおほせ (芝居者↓旦那 三上十七ウ4)

○釋迦坊も後悔したさうサ (西洋好↓となりの客 初九ウ8)

初め二例は身分下位の方が、第三例は雰囲気緩の方が、他方に優先している。それぞれ七例と一例とが認められた。なお第三例は会話の後半で茶化した表現である。

⑮ 身分下位―知的優位

○これが異人のコックといッたらわかりやすめへがちやぶ

くやの直傳でござへすぜ (落語家↓若旦那 三上廿六オ7  
〜8)

○葱の湯どふしをあがつてごらうじろ (同 三上廿六ウ1)

⑯ 身分上位―依頼行為

○酒エもてこずかい。 (鄙武士↓女中 初十四ウ5)

○熱くしてモウ二合εそして生肉もかはりだアはやくしろε

(諸工人↓女中 初廿三ウ7)

○わちきのかげをかくしておくれε (歌妓↓はこまはし

二下八オ5)

○牛肉のかはりをたのしますヨく (車力↓女中 二下十五ウ3)

○サアはやくいひつけておくんなし (娼妓↓茶屋の女中

二上十四ウ1)

第一階待遇表現においてはほとんどがゼロで身分上位が優先するが、第二階以上になると特に女性にプラスが顕著で、依頼するといふ要因が優先する。例数では延べで身分上位が優先した二五例、依頼の要因が優先した一八例が認められた。

⑰ 身分上位―疎遠

○氣がきかねへ少女<sup>がき</sup>ダ (落語家↓女中 三上廿二ウ7)

⑱ 雰囲氣緩―精神的劣位

○かれなぞはをしむにもあまりある人ぶつサ (半可↓友先

生 二上十六ウ8)

○そこはもの知りだからかんがへたネ (文盲↓安さん 二下  
十二オ2)

第二例では太田道灌をほめているが、プラスになっていないのはリラックスした雰囲氣が優先しているからと考えられる。

⑲ 雰囲氣緩―依頼行為

○もうひとばん附合ふべしサ (墮落個↓可ちゃん 初十四オ3)

○あとのきまりをおつけεな (それしやあがり↓茶店女

三下九オ2)

○マアおきゝなせへし (野幫間↓若旦那 初十七オ2〜3)

第一階待遇表現では雰囲氣が優先しているが、第二階では依頼といふ要因が優先する例が多く、延べでは雰囲氣緩が優先した七例、依頼の要因が優先した五例が認められた。

⑳ 雰囲氣緩―疎遠

○釋迦坊も後悔したさうサ (西洋好↓となりの客 初九ウ8)

○となりの年間はサく牛をば平氣岡本で食る達者サは (野

幫間↓若旦那 初十九オ4)

西洋好となりの客はよそ者同士であるが、第一階待遇表現値は

ゼロであり、会話の進行に従ってリラックスした雰囲気優先したことになる。

②① 精神的劣位—親密

○下駄にやき味噌ほどこがふおしよくにんさまだア (諸工人—仲間 初廿三ウ1)

話手である諸工人から見ても、素材としての諸工人は親密な関係にあるが、自慢の精神的劣位が優先して第二階待遇表現はプラスになっている。

②② 親密—依頼行為

○是非附合<sup>つきあひ</sup>ε (楓湖先生—生文人 初廿六オ5)

○五ツ時ぶんまでに出て来ておくれεヨ (それしやあがり

↓茶店女 三十一ウ5~6)

第一階待遇では親密な関係が優先するが、第二階待遇以上では特に女性に依頼の要因が優先する例が多い。優先例数は延べでは親密六例、依頼行為四例であった。

②③ 疎遠—知的優位

○あれはネモシ斯いふ譯でござへす (西洋好—となりの客

初八オ1)

○西洋にやアそんなことはござせん (同 初七ウ4)

二つの相反する性格の待遇要因が競合した場合の優先関係は、以上のようになる。なお①⑥・①⑨・②②で、依頼行為の要因とプラスに働きのくい要因との競合には、第一階待遇の表現に依頼の要因によりプラス語形になるという影響がほとんど見られない。これは、第一階待遇が話手から相手へのものであり、依頼の要因が、例文で多くがそうであるように、話手または素材としての話手から素材としての相手に対する待遇、つまり第二階以上の待遇に該当するためと言える。

三 データの量的なまとめ

前節の①から②③までを整理すると表Ⅰのようになる。表中の数字は、左の項目が上の項目に優先する例数である。なお同一の例文で第一階待遇表現と第二・三階待遇表現に見られる優先順が一致しない場合は、別の例文としてそれぞれを扱った。

表Ⅰの項目は二つが競合した場合の優先順から、全体の優先順を推定して排列してある。ここで仮にこれらの項目を同じカテゴリーで相反する要因に同じローマ字の大文字・小文字を割り振ってみた。その結果は、表Ⅰの表側の更に左に記した排列となり、対応する大文字・小文字がほぼ対称的に現れることとなった。

以下の論述に使うローマ字は、要因についてのこの符牒である。

表 I 二つの待遇の競合による優先の例数

表側の要因から見て、上方三角部分が表頭の要因より優先した例数、下方三角部分はその逆の例数。

#### 四 要因の優先順

A 品格保持  
B 知的劣位  
C 精神的優位  
D 雰囲気緊  
E 身分下位  
e 身分上位  
d 雰囲気緩  
c 精神的劣位  
F 親密  
G 依頼行為  
f 疎遠  
b 知的優位

	A	B	C	D	E	e	d	c	F	G	f	b	
A	*	1				10	4		13			4	A
B		*					1		1				B
C			*	2	5					1	1		C
D				*					4			3	D
E					*		7					6	E
e						*				25	1		e
d					1		*	3		7	4		d
c								*	1				c
F									*	6			F
G						18	5		4	*			G
f											*	3	f
b												*	b

二要因の各対についてだけでなく、諸要因を全体として眺めて規則的なものがあるかどうかを考えよう。それには有向グラフを利用するのが便利であろう。要因 $x$ が $y$ に優先することを「 $x \rightarrow y$ 」で表す。互いに優先し合う例があれば「 $x \leftrightarrow y$ 」と表される。こうして描いたグラフで矢印がループを生ぜず完全に一方向に流

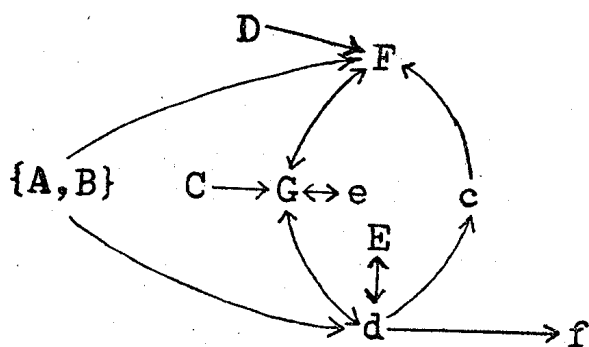


図 I ループ部分を中心とした待遇要因の優先関係

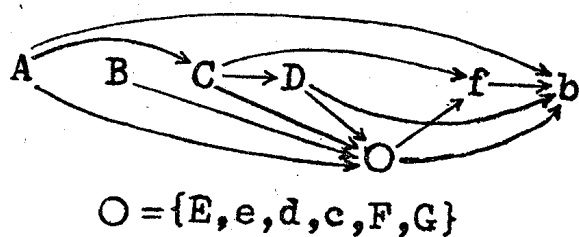


図 II 要因全体の優先関係

れば、すべての要因の間に統一的な優先関係があることになる。表 I に基づいてこのようなグラフを描いてみると、 $d \cdot c \cdot F \cdot G$  の所でループが出来てしまう。このループと、それに直接関係している要因とを取り出して示したのが、図 I である。

このループを成す諸要因を仮に同列とみなしても、 $E \cdot e$  が一方向の流れを妨げるものとして残る。E が d と、e が G と両方向の矢印で結合している（これも一種のループである）からである。

そこで更に、E と d とは、また e と G とは同列であると考え、先に同列とした四つの要因と併せて  $E \cdot e \cdot d \cdot c \cdot F \cdot G$  を一点

とみなす。この結果として得られるのが図Ⅱであり、A・B・C・D・O (E・e・d・c・F・G)・f・bについて統一した方向を得ることができる。図Ⅱで左に位置する要因はどプラスの待遇表現を生ずるのに利いていると、大づかみに述べることでできよう。すなわち、要因間に競合がある場合には、品格保持↓知的劣位↓精神的優位↓雰囲気緊↓「身分下位・身分上位・雰囲気緩・精神的劣位・親密・依頼行為の混合体」↓疎遠↓知的優位の優先順で待遇表現に反映すると思われる。

なお中括弧内にまとめた部分は待遇の優先順においては中間に位置し、情況によって変化しやすい部分であり、『安愚楽鍋』の資料だけではこれ以上細かい順序づけは望めない。

## 五、会話の進行と待遇の変化

以上の考察は発話の一面面を切り取って行ったものであるが、会話の進行に伴って待遇が変化することがあるのは、我々の体験に照らしても明らかである。待遇における雰囲気や親疎の心理的關係にも影響することであるが、例えばよそ人と話をする場合、相手がどの程度の身分や教養を持つか、従ってどの程度の待遇表現をしたらよいかかわからず、適切な判断をするに足る情報を得ることが必要になる。その過程において話手は、相手に不相応な

表現をして劣位に見られることを警戒して、平常よりも丁寧な言葉使いをする。しかし会話の進行に伴って、相手の程度がわかりうちとけてくると、相手との大きな優劣関係が生じない限り、表現も会話の初めよりはプラス値は高くなるであろう。これは、会話の初期に身構えた緊張がとけて、全くの疎遠から待遇が少し親密の方向へ移動した結果であるとも言えよう。よそ人を相手どる場合でなくても、ぎこちなさ、あるいは改まった雰囲気のため会話が円滑に運ぶようになるまでの間は、待遇表現のプラス値が高い場合の多いことが予想される。

待遇自体は外部から直接には観察できない。しかし待遇とそれに基づく待遇表現形との間には高い相関があると考えられるので、ここでは表現形のランクの動きを追って、待遇の変化する傾向を間接的につきとめようと思う。

会話の進行に最も影響されやすいのは、相手との待遇を反映する第一階待遇表現であると言えよう。そこで文末のこの部分の形の動きに着目する。直接の数量化が困難なので、ノンパラメトリックなトレンドの検定法<sup>(註3)</sup>を使うことにする。帰無仮説として「会話が進行すれば、第一階待遇表現値は大勢として高いランクに移る」を立ててみる。帰無仮説であるから、検証したい仮説「会話が進むにつれ待遇(表現)がプラスの方に傾く」ということは概し

まず『安愚楽鍋』に見られる文末の第一階待遇表現のランクを左のように認めた。

ゝでいぢります  
ゝでいぢります  
ゝでいぢ入ます  
ゝでいぢ入す  
ゝでいぢ出す  
ゝでいぢ出す  
ゝやす  
ゝだ  
ゝぢや

くでぐさいます

---

くさんす  
くだます  
くます  
くです

---

くだ

表Ⅱに掲げる十個の事例について、すべて帰無仮説は小さな危険率で捨てられる。従って話を進めるにつれて待遇が上昇する傾

\*\*\*は千分の一以下の確率、△は10%の危険率でも有意性が無いもの。

話手	相手	文数	上昇 数	確率 %	下降 数	非下 降数	判 定
西 洋 好	隣 の 客	27	75	***	172	179	△
野だいこ	若 旦 那	34	190	.38	203	358	△
娼 妓	茶屋の女中	27	59	***	64	287	△
半 可	友 先 生	38	10	***	62	641	△
町 人	士	20	41	***	68	122	△
芝 居 者	旦 那	30	68	***	211	224	△
はなし家	若 旦 那	31	91	***	260	205	△
其者上り	茶 屋 女	35	46	***	20	575	△
茶 屋 女	其 者 上 り	38	63	***	42	661	△
新 聞 好	愚 助	37	36	***	34	632	△

きが無いということは、確かである。では積極的に下降するかとなれば、今度は第*i*文とそれより後の第*j*文とについてランクが低まらない場合の数で検討しなければならないが、もともとランクが男の話手で五段階、女の話手で三段階というように少ないので、文の対が同ランクになることが多く、はっきりした傾きは検出されなかった。ただし文の順を追ってランクをプロットした図



によれば下降の気味が見えることを、言っておこう。

註3 水野坦・林知己夫・松下嘉米男・青山博次郎『統計数値表の使い方』(朝倉書房 昭二九) 一三五—一四〇ページ

# 付 録

卒業論文を成すにあたって『安愚楽鍋』の会話部分に見られる第一階・第二階・第三階の待遇表現を分類し、正確を期するために国立国語研究所編『牛店雑談安愚楽鍋 用語索引』の索引と照合した。(第一階待遇表現は全部、第二・第三階待遇表現は形態上プラス・マイナス値を持つ表現について照合。)その際、索引項目の脱落、重複、不合理と思われる分類、所在表示の誤植と思われる箇所、及び参照語の脱落をいくつか発見したので、今後の研究に資するため付録として記載しておく。

頁	見出し語	本文編 該当箇所	本 文	備 考
---	------	-------------	-----	-----

## △自立語▽

(重 複)

95	いけない	二上	金がたりないで	形容詞「いけない」(終止形)だが助動詞「ない」
	九ウ8	ひよつとはちを	かくといけない	(終止形・192ページ)にも

から	記載がある。なお助動詞「ない」に対する動詞「いける」の記載はない。また「たりない」については助動詞「ない」(連体形)に記載がある。
----	---

(その他)

101	おあい	三下 四オ5	いまじやアちい はおあひだおは やしにしてしま ッて	「おあひだ」(仲、関係)と解釈できるが、「おあい(御間)」と助動詞「だ」に分類されている。なお「おあい」は「三上四オ5」と記載されているが該当語はなく、「上」は「下」の誤りと思われる。
140	つかう	二上 十二オ8	廣間の手水鉢で むけんの鐘をつ かふかと	「(鐘を)つく」と解釈できるが、「つかう(使)」に分類されている。なお助動詞「う」は記載されている。

## △付属語▽

(脱 落)

た・か	二下 十五ウ1	ヨットこぼれ たか	助動詞「た」、終助詞「か」の脱落。「か」は副助詞、係助詞、並立助詞にも該
-----	------------	--------------	--------------------------------------

192	189	183	(その他)
に	で	た	と
二下 廿一ウ 8	二上 十七オ 1	二上 十三ウ 3	初 廿五ウ 7
ざれば 開港互市にあら	三題噺は正行流 で鳴呼執心汝の 馬廉と田町の ：狂言は驚流で 凹齋仁右衛門の	目くされがねを だしやアがつた から	脱しやうと身じ んまくをしてゐ る最中
助動詞「なり」(連用形) だが、その項に該当する 所在表示はなく、「三下 二一ウ 8」の記載がある。 しかし本文三下廿一ウ 8 に該当語はないので「三」 は「二」の誤りと思われ る。	助動詞「だ」(連用形) だが格助詞に分類されて いる。なお、後者の「で」 は助動詞「だ」の項にあ る。	助動詞「た」(終止形) の「助動詞＋た」に分類 されるべきだが「用言＋ た」の項にあり。「やあ がる」は助動詞の項にあ り。	当はない。「こぼれる」 は記載あり。 接続助詞「と」の脱落。 格助詞、並立助詞にも該 当なし。「脱す・よう・ 身じんまく」は記載あり。

208	三上 十四ウ 4	五分も透きやア ござへせん	助動詞「ん」(終止形) の「助動詞＋ん」に分類 されるべきだが「用言＋ ん」の項にあり。「ござ る」は動詞、「す」は助 動詞の項にあり。
145	△自立語V とっくり↓とくり	「とっくり」に所在表示はなく「とくり」 は記載なし。	
149	△付属語V にして↓付属語	付属語索引の部に「にして」の項はない。 「ひいてやる」等の補助動詞の用法を含 めて動詞「やる」の項があり、別に上記 の参照見出しがたてられている。しかし 付属語索引の部に「やる」の項はない。	
168	やる↓付属語		

参照語の脱落

(昭五十二日文卒)

終